

業務分析報告

卒後3年目の看護師のための事例研究研修企画での工夫

盛岡赤十字病院 看護部（教育委員会）

杉内 哲子・菊池 美香・佐々木育子

I. はじめに

看護師は、専門職として自立し、自己研鑽を続けていくことが必要である。一方、組織には看護師の能力開発を支援しながら、提供する看護の質の向上を図ることが求められている。2014年度から研修企画について検討し、卒後3年目看護師が看護実践を主体的に行い、論文にまとめ発表し、何らかの達成感を得るように工夫をこらしてきた。その結果、2015年度に事例研究に取り組んだ17名の看護師それぞれが、積極的に看護実践し、患者と関わる事ができた。そこで事例研究研修企画にどんな工夫をしたかを実践報告する。

II. 倫理的配慮

この実践報告では、卒後3年目教育の成果の評価として個人が特定されないように処理した。病院の倫理委員会で承認を得た。

III. 実践内容

1. 事例研究課題

クリニカルパスを使用している患者が多く、業務中心で看護過程の展開が見えないという問題を抱えていた。受け持ち患者の看護過程の展開を意識した看護実践ができることを目的とした。

2. 2014年度の実践内容

ケアカフェにて看護観を見出し、リアルタイムで関われるよう病棟にアドバイザーを個別依頼した。

3. 2015年度の実践内容

2014年度に加え、新たな取り組みとして先輩看護師の事例研究のリフレクションやアドバイザーに全体研修を企画し、目的、役割について伝えた。クリニカルパスの対象患者であっても研究の視点で看護計画立案、カンファランスを実施し記録に残すことを説明した。

4. アドバイザーからみた研修生の反応

「事例を展開したいという動機を明らかにした」「看護過程やカンファランスを意識して行った」と研究的視点で事例に取り組んでいる姿勢が見られた。患者に関わる姿勢について「看護する喜びや仕事のやりがいを感じてもらえたと思う」「患者の思い、家族の思い、自分の思いを何度も見つめ直していた」と、患者に寄り添うことができていた。チームの中でのコーディネーターとしては、「自分の看護過程のアピールやスタッフへの介入依頼ができれば良かった」と役割が不足した面もあった。

アドバイザーの役割では、チーム全体でカンファランスをしたことで「チームの人達に色々意見を聞けて偏らなくて良かった」「スタッフ間でも研究に協力でき、有意義であった」とアドバイザーの負担の軽減に繋がった。その反面、「アドバイスする人の意見が違い、研修生が困っていることも多かった」とアドバイスの難しさがあった。また、「自分のアドバイスが本当にいいのか不安になった」とアドバイザーの不安や「研修生がアドバイスを「否定された」ととらえてしまう部分があり、どのように声掛けしていくか考えさせられた」という悩みを抱えていた。

IV. 考 察

アドバイザーから見て研修の成果は、患者と関わる姿勢が良くなったことである。それは、先輩の事例研究のリフレクションを共有したことで、患者との関わり方のヒントを得たと考える。さらに、チーム全体で研修生に関わったことで、看護の展開ができたことも患者と関わる姿勢に良い影響を与えた。コーディネーターの役割不足に対しては、病棟でのサポート方法について検討が必要である。

またアドバイザーの役割では、アドバイスの難しさや研修生との関わりの悩みをかかえていることが分かった。病棟のアドバイザーと教育担当者の連携した教育体制を見直す必要がある。

V. 今後の課題

今後は、教育担当者、研修生、アドバイザーと一緒に研究の方向性を見出す機会を設け、アドバイザーのスキルアップも担った企画を目指す。

(本論文の要旨は平成28年7月1日、2日 第17回 日本赤十字看護学会学術集会で発表した)